

頸部前湾整体

―症状及び病気の発生と進展―

病気の症状は、どんな健康な人であっても、少なからず起きるものです。例えば睡眠時間が不足すると、日中眠気を覚えます。身体もだるさを感じます。でも少しの休息を取ることができれば、症状は改善します。何かには身体をぶつけた結果としての軽い打撲であれば時間の経過とともに痛みは和らいでいきます。

さて、健康な人は風邪を引かないでしょうか。そんな事はなく、条件によっては鼻水、咳き込み、悪寒など、様々な症状が起きる者です。ですが、そのような人達は一晚あるいは1日寝るだけですつきりするので、外に出、社会に出て、大切な授業、大事な会議や取引、接客などなど、中々休む事ができず、手っ取り早くお薬に頼る事になります。解熱剤、咳止め、頭痛薬、あるとあらゆる薬は薬局、コンビニ、スーパーで直ぐ手に入れる事ができるのです。

環境や生活状況の整備をしてもなおこれらの症状がいつまでも続いて治らない場合は神経電流の伝達障害、つまり自己治癒力の停滞が起きています。頸部前湾整体（以下前湾整体）でいうところの全ての病

気の原因、スタグネーション（停滞）が発生していると考えられます。

スタグネーションは必ず上部頸椎、つまり頸椎一番及び頸椎二番のところできています。上部頸椎以外の神経電流の阻害はほとんどが補正の為の第二次的なものにすぎません。

スタグネーションが解消すると、補正作用も時間の経過とともに消えていきます。

つまり上部頸椎が原因であり補正作用は結果である。

胸椎や腰椎の部位における神経電流の圧迫による胃もたれ、背中の痛み、腰痛便秘などが起きてもそれらは全て補正作用であり、上部頸椎のスタグネーション（原因）を解消すれば時間の経過と共に症状（結果）も改善の方向へと向かう。

私達が生まれてからおよそ三、四ヶ月経つと、頸椎に二次彎曲が起きます。俗に首が据わる、と言いますが、このことによつて頸椎の前湾ができ、やがて成長して一念前後赤ちゃんたちは、大きい頭を支えることができるのです。前湾全体では、上部頸椎を整えることで、人が生来的に持っている治癒力Ⅱ自然治癒力を発揮させます。

胸椎、頸椎を直接治療の対象にしても、同様に症状の改善がみられるものの、それは薬を服用するに依つていわゆる対症療法であつて、本来

の自己治癒力の助けにはなりえず、健康を手にする訳ではない。

スタグネーションが起こる原因は先天的あるいは後天的双方考えられるが、ストレス、薬の常用、生活上の問題などが考えられる。スタグネーションが起こるとまず、上部頸椎に近い扁桃、鼻咽腔、耳下腺、副鼻腔、歯牙、顎下線等に錠剤する微生物（最近やウイルス）が活性化し炎症を起こす。風邪に似た症状が発生する。頭痛、肩凝り、発熱、背腰部痛、倦怠感、下痢等である。

以上の事から考えられることは、風邪がなかなか治らない、風邪を引きやすい、夏でも風邪を引く、のどが常に居たい、鼻の詰まりが治らない、微熱が続くなどを訴える人はスタグネーションの存在を証明するが如くといえよう。

これらの症状は長引く事は、風邪の症状にとどまらず、身体各所に反射を起こし、あらゆる症状を引き起こす事になる。それは腰痛であり、めまいであり動悸であり、皮膚の痒みでありさらには情緒不安定であり、身体各所の痛み、しびれである。

なかでも、扁桃、鼻咽腔が引き金になることが多く、この引き金を焦点（フォーカス）と呼び、反射（症状）が起きた場所を障害野（ディスプレイヴァンス）と呼ぶ。

この状態における骨格の正面から見た歪みは余り明確ではないが、骨盤の歪みははっきりと見分けることができる。側面から見た場合、頸椎の正常な前腕は消失しかけている。経絡的には、リンパ、背、大腸の亢進が見られよう。

東洋医学一般で言うところの、気の病（やまい）の段階で、以上は表面の浅い所に存在し、内部までは進んでおらず、頸部前湾整体を行うと即効性が期待できる。この時期を、免疫反応期と呼ぶ。さらにこの状態に加え、生活習慣が劣悪な場合、機能の非正常化を超え、組織機管に損傷が始まる。視覚的には確認を見ずではあるが、潰瘍、萎縮、肥大、ポリープ、梗塞、繊維化、結石化の準備段階である。生活の欧米化、特に食生活の劣化と運動不足等が誘因となり、膵臓のインシュリンの分泌異常から糖代謝が正常でなくなり、加えて血中の油成分の増加、詰まり高脂血症を招く。

まだ、各種検査で確認できるのは高血圧程度だが、肝臓にも負担がかかり始めている。症状的には胃の不快感、もたれ、便秘、下痢。疲れやすい等の消化器症状が加わってくる。

この状態での骨格の歪みは正面から見て脊柱はC型のカーブを描き、骨盤もいっそう変位が明確になる。頸椎の側面観察では正常前湾を完全

に失い、直立あるいは前湾過剰になっている。

経絡的には免疫系に加え、脾・膈や肝に亢進が見られるが、一部機能減退も見られる。東洋医学で言うところの、血病（けつのやまい）、現代医学的には器質以上の初期で、これを前糖尿病と呼ぶ。

この時期、本人が異常を自覚できるが、何とか生活できてしまう為に、忙しさにかまけて、無視してしまう傾向が顕著である。

整体を受けるにしても、生活習慣の改善は必須だが治癒する可能性は高い。

病気がさらに進んでしまうと、血液検査、内視鏡、エコー、レントゲン、MRIでも異常が確認でき、血管も動脈硬化状態で、脳や心臓の血管にいつ破綻が来てもおかしくない、さすがに、誰もが病院へ行かなくてはと思うようになる。

この時は病気においても、病名が明確になる。皮膚の色調、つやにも変化を見てとれる。身体は重いし常に頭もはつきりしないし手足も冷たい。食欲もなく痩せてくることが多い。

その他症状は百花繚乱の如くである。大抵の人は服薬をしている。

骨格の状態は脊柱正面でS字状のカーブを描き骨盤は益々歪み、頸椎の側面観察は逆湾曲、つまり後湾あるいはひどく前湾している。上部

が前湾、下部が後湾というケースもある。

経絡的には脾・膝・肝はもとより機能減退は必ず見られる。慢性病といわれる状態である。最近では生活習慣病ともいわれる。

この時期を病名決定期と呼ぶ。俗に言うところの半健康人と呼ばれる状態で生活の改善と治療によって大きな成果が得られよう。しかし俗に病名決定期になって整体をする場合、徹底した生活管理が必須であり、当分の排除は勿論、十分な睡眠時間の確保、運動が大切である。

ただ、やはり一番大切なことは何かというと本来自己が持っている治癒力を信頼することである。